

「カフカ『変身』を読み直す」講座の概要

☆2024 年 9 月 5 日（木）実施

講師・・・川島 隆 先生（京都大学教授）

場所：なるお文化ホール

出席人数：201 名



現代文学に強い影響を与えたカフカの代表作『変身』をめぐる、2022 年に同書の翻訳本を上梓なさった川島先生から、貴重なお話を色々うかがいました。

翻訳家としての立場から、訳に苦勞なさった点や、訳の工夫で原作者の意図を忠実に再現しようとなさったことなどを詳しくお聞きしました。

例えば、主人公のグレゴールが朝起きると自分が Ungeziefer（害虫）に変身していた、という有名な冒頭のくだりですが、高橋義孝訳（1959 年）では Ungeziefer を「毒虫」と訳されていました。

しかしこのドイツ語の単語には「毒を持っている」という意味はなく、正確さに欠ける面がありま

す。また多和田葉子訳（2015 年）では「ウンゲツィーファー（生け贄にできないほど汚れた動物或いは虫）」と、あえてこの言葉が外国語であることを読者に意識させるような個性的な訳でしたが、川島先生ご自身は「虫けら」と、非常にシンプルでかつ元のドイツ語の意味からも無理の少ない訳となっていました。

それから、カフカ自身の素顔に迫る解説のあと、この小説を「ひきこもり小説」「介護小説」とみなす新たな解釈を紹介されていました。主人公のザムザが虫となってから、家族の者は彼を一室に閉じ込めて、食事をはじめ身の回りの世話をしますが、ザムザはやがて部屋の中で死を迎えます。その様子の描写は、ちょうど「ひきこもり」の家族や老人などを介護するさまの寓意となっている、という解釈です。

最後に、カフカが現代文学に与えた影響について、この『変身』のように日常性のリアリズムと同居するようなファンタジーを描いた点を先生は挙げられ、それが南米のガルシア＝マルケスやボルヘス、また日本の村上春樹の作風などに強い影響を与えた点をご説明なさいました。

講座のご評価：

「本日の講座はお客様が期待するようなものでしたか。」という問いに①「あてはまる」105 名（55%）、②「どちらかといえばあてはまる」74 名（39%）、③「どちらかといえばあてはまらない」9 名（5%）、④「あてはまらない」2 名（1%）、評価記入なしが 11 名でした。

お客様の感想としましては、肯定的なものは「『変身』の解釈についてよく分った」「熱のこもった講演だった」「もう一度、川島先生の訳で読み返したくなった」「介護小説という解釈は面白い」「ドイツ語の言葉の意味と訳しかたの解説が良かった」「読み方によって、こんなに作品が違って見えるのだと言うことに驚いた」などがありました。

否定的なご感想としましては、「内容が難解でついていけなかった」というご意見が複数、見られました。

お客様のご感想紹介：

「最新の最新『変身』を著されたご本人からお話を聞けるぜいたくな時間を、ありがとうございます。語られる声にも勢いがあり、雄弁な解説は興味深く、投影された画像も素敵に凝っていて、楽しく拝聴しました。ぜひ、先生の訳を読んでみようと思いました。」

「『介護文学』として読むと、なるほど！と思いました。変身したものがなぜ虫だったのか・・・と思うと、少し納得できました。もう一度読み直してみたいと思いました。ありがとうございました。」

「読む視点をどこに置くか、で味わいも変わる。自分自身も、実家の中での娘、今の家族の中での反抗期を超えつつある息子を持つ母、という立場などを重ねた。

もともと読書が得意ではなかったが、ここ最近は読むようになり、楽しむコツをご教示いただけたので楽しかった。ありがとうございます。」